

【編集後記】

本号は本来、2015年3月に出すべきだったが、諸事情で編集できなかった。とは言え、本研究グループは、フランスの研究者との共同論文集『道教の聖地と地方神』（東方書店、2016年2月）の出版という成果を出すことができたのは幸いである。

本号では、雷聞教授の「山林と宮廷のあいだで——中晩唐の道教史における劉玄靖」を巻頭としている。この論文は、会昌の廃仏で有名な劉玄靖について、関連の碑文や伝記の分析を通して、劉玄靖に対する従来の評価に変更を迫る議論となっている。本論は、中国の研究誌に発表されたものを酒井規史氏が翻訳したが、その際に著者は中国の研究誌で割愛した資料や内容を加えており、本稿がもっとも充実したテキストになっている。

次は、山下一夫氏の「近現代の河南における魏華存説話——「二仙救唐王」をめぐって」であるが、本論と次の大西和彦氏の論文は、ともに洞天思想でキーパーソンである魏華存に関連している。山下氏は、魏華存が「二仙」という呼称で近世から近現代に崇敬された事情を、「救唐王」故事や懷榔などの民間文芸と濟源付近での現地調査にもとづいて考察している。この方面の問題は、従来の日本の研究ではほとんど扱われておらず、開拓性を備えた議論である。また、魏華存は王屋山との関係が想定され、茅山の神降ろしでも重要であるが、その魏華存の信仰の変容した状況を議論している。これは、王屋山という宗教信仰の場の歴史における重要な構成要素でもある。

そして、大西和彦氏の「16世紀ベトナムにおける道教の展開——『伝奇漫録』の「徐式仙婚録」を通じて」は、その魏華存がベトナムでも尊崇され、ベトナムの洞天思想に関連していることを論じている。本論は、『伝奇漫録』や『嶺南摭怪』などの文献からベトナムの洞天思想・神仙思想を浮き彫りにし、さらに1497年撰述『峨嵋寺碑』、1511年撰述『明慶大名藍碑』、1515年撰述『無為寺碑』、1528年撰述『祥先寺碑』などの仏寺の碑文によって、洞天福地思想がベトナムでどう扱われていたかを明らかにする。そのみならず、徐式洞という洞窟に対するフィールドワークの報告まで含んでいる。ベトナムの洞天思想・神仙思想の研究は大西氏の独擅場であり、かの中国の盆栽についてベトナムのことから書き始めたフランスのロルフ・スタン教授すら、この問題には足を踏み入れていない。本論は、こうした意味で非常に貴重で、議論も周到であるとともに、洞天思想の東アジア的展開に大きな示唆を与える。

最後に、土屋の「李白と司馬承禎の洞天思想」は、李白と司馬承禎の洞天思想との関連を具体的に考えようとしたものである。また、同じく「紫柏山と道教—第三大洞天か」は、2012年の現地調査にもとづく報告である。調査時間が乏しく、具体的な調査結果が出せなかったため、発表しないまま3年経つ

てしまったが、紫柏山に関する議論はあまりないので、いくばくかは見るべき点があるかと考え、この機会に発表することにした。

本年までの研究において、洞天思想を宗教信仰の場と結びつけながら考察する観点が重要であると考えようになった。これは、道教史という枠組みにこだわらず、道教とは異なる宗教との共存・共同による宗教信仰の場を研究する、という観点が必要であろう。その観点には、宗教信仰を実践する場に赴く、いわゆる巡礼の過程も考慮すべきである。今後の研究は、こうした問題意識を持ちながら進めていきたい。

ご寄稿くださった中国社会科学院の雷聞教授に感謝を表します。また、ベトナムからご寄稿くださった大西和彦先生に感謝を表します。制作には古賀弘幸氏にご協力いただきました。記して謝意を表します。(MT)

洞天福地研究（どうてんふくちけんきゅう）第6号
ISSN 2186-182X

発行日：2016年3月15日

編集：専修大学土屋昌明研究室内 洞天福地研究編集委員会

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区三田 2-1-1

専修大学 9603 the0561@isc.senshu-u.ac.jp

制作：古賀弘幸

発行人：尾方敏裕

発行所：株式会社好文出版

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 540 林ビル 3F

TEL03-5273-2739 FAX03-5273-2740

<http://www.kohbun.co.jp/>

印刷・製本：音羽印刷株式会社